

『更級日記』の虚と実からその成立を考える

飯島裕三

はじめに

『更級日記』を初めて読んだ時から長い年月が経った。今までに何度かこの作品に関連する論考を発表して来たが、最近「日記」という二字がこの作品の本質を見えにくくさせている根本的な要因だと思ひ始めた。それというのも日記と聞くと、どうしてもそこに本人の思いが素直に表現されているという思い込みが生じる。だが、この日記を書いた本人はいくつもの物語を物した虚構の達人である。^(注一)『更級日記』とは何かと考える時に、日記という名称に幻惑されない、それなりの心の準備が必要になるだろう。

そもそも『更級日記』は、五十歳を幾つか過ぎた孝標女が、四十年ほど以前の自分の生い立ちから思い起こして書き上げた回想記だと考えられてきた。書き出しは、彼女が十三歳の折、上総の介であった父に従って上京するところから始められる。そして我々はその歴史的事実を重ね合わせてこの作品を読もうとする。そうするとその書き出しから平然と事実と相違することが述べられていることに戸惑ってきた。今まで研究者は日記であるという先入観から抜け出られず、何とかその食い違いを説明しようとしてさまざまな解釈を試みてきた。しかし、いったん日記という枠組みを取り外し、書いてある通りに読んでみれば、そこに作者の創作意図が透けて見えて来るのではないだろうか。ではなぜ孝標女は事実を改変する必要があったのか。事実の改変は冒頭に限らず日記のそれ以降の記述にもしばしば見られる。中には虚実のいずれかを確認できていないものもあるに違いない。つまり『更級日記』という作品は、虚構を内包した回想記風の作品であるということ前提として読み進めるべきものなのだ。ではなぜ自分の人生に起きたことをことさらに変更する必要があったのだろうか。その理由が明らかになれば、作者の意図が千年の時を隔てて浮かび上がってくるに違いない。

そのヒントになりそうだと思うことは、孝標女が生きた時代にあると考えられる。当時の人々、特に上層の貴族層においては極楽浄土への往生を希求することが沸騰していた時代である。貴族たちは折に触れて物詣や仏事に狂奔していた。日記の記

注一 『更級日記』奥書に、「よはのねさめ、みつのはま松、みつからくゆる、あさくら」などはこの日記の人のつくられたとそ」とある。

事中にも、帝の一世に一回限りの大嘗会の御禊の日に、わざわざ都を出発して長谷寺に向かう一節が描かれる。周囲の人は呆れるが、中には「物見て何にかはせむ。かかる折に詣でむ志を、さりともおぼしなむ。かならず仏の御しるしを見む」と作者の行動に理解を示す人もいた、と書かれている。この参詣が行われたのは永承元年（一〇四六）、作者三十九歳の折のことであった。実はこの六年後の永承七年は、末法第一年に当たる年として日本の仏教界では喧伝されていた。人々が仏によって救済されることがますます絶望的になっていく時代を、作者や周囲の人々は実感していたはずだ。しかし、この事実がかえって当時の人々を阿弥陀如来の浄土へ向かわせることになった。末法の世は五十六億七千万年という気の遠くなるような後に、弥勒仏の登場によって終わるといわれる。この小論の第四節「関寺大仏」のところでも述べるが、孝標女は弥勒菩薩についての知識もあり、末法の意味も十分理解していたと考えられる。

『更級日記』がなぜ書かれたのか、従来いくつもそれに関する論考が提出され来た。この小論では事実が変更されている箇所を分析することにより、『更級日記』の中に隠された「意図」の存在を明らかにしたい。そのことよって『更級日記』の本質を炙り出したのである。

第一節 『更級日記』―その冒頭に描かれる薬師仏について

この日記の冒頭部分は次のように書き出される。

あづま路の道のはてよりも、なほ奥つかたに生ひ出でたる人、いかばかりかはあやしかりけむを、いかに思ひはじめけることにか、世の中に物語といふものあんなるを、いかで見ばやと思ひつつ、つれづれなるひるま、よひるなどに、姉、継母などやうの人々のその物語、かの物語、光源氏のあるやうなど、ところどころ語るを聞くに、いとどゆかしさまされど、わが思ふままに、そらにいかでかおぼえ語らむ。いみじく心もとなきままに、等身に薬師仏を造りて、手洗ひなどして、人まにみそかに入りつつ、「京へとくあげたまひて、物語の多くさぶらふなる、あるかぎり見せたまへ」と、身をすてて額をつき祈り申すほどに、十三になる年、のぼらむとて、九月三日かどでして、いまたちといふ所へうつる。

年ごろあそび馴れつる所を、あらはにこほちちらして、立ちさわぎで、日の入りぎはの、いとすぐ霧りわたりたるに、車に乗るとて、うち見やりたれば、人まには参りつつ額をつきし薬師仏の立ちたまへるを、見すてたてまつる悲しくて、人知れずうち泣かれぬ。

（小学館 日本古典文学全集 犬養廉・校注・訳『和泉式部日記・紫式部日記・更級日記・讃岐典侍日記』二八三～二八四頁 傍線筆者 以下『更級日記』本文の引用本文は同書による。傍線は筆者。以下同じ）

まづ、最初に、「あづま路の道のはてよりも、なほ奥つかたに生ひ出でたる人」とある事に関して、ここが『古今六帖』にある「あづまぢの道のはてなる常陸帯のかごとばかりもあひ見てしがな」（紀友則）を引歌としてゐることはほぼ間違いないだろう。しかしそうだとすれば、上総の守の父に従つて下向してきたはずの孝標女の居場所は常陸よりもっと奥地ということになり、事実とは異なる記述がなされていることになる。その冒頭箇所から何故こんな書き方がされるのであろうか。

ところで、「生ひ出づ」という動詞だが、『源氏物語』など平安朝の他の作品では「その地で生育する」という意味で用いられていて、「出生する」という意味ではほとんど用いられない。『更級日記』も作者が上京する途中の浜名湖近くで川を渡ろうとする箇所に、

下りし時は黒木をわたしたりし、このたびは、あとだに見えねば舟にて渡る。入江にわたりし橋なり。（二九五頁）

と記された箇所があり、彼女が京から上総に下向し今回再び戻ろうとしていることが述べられているので、日記の書き手が東国に生まれ育った田舎人ではなく、一時的にそこで暮し都に帰って行くという事実は正しく記されていることになる。となると問題は、上総で暮していたにもかかわらず、何故常陸よりも奥の「陸奥国」に「生ひ出でたる人」という虚構が語られるのか。その理由をめぐっては諸説あるが、ここでその代表的なものを引用してみる。

（一） 上総は古く常陸より南下したので、東海道の果てより奥と考えられていた。

（笠間書院『更級日記』池田利夫 訳・注）

（二） 作者が少女期の数年を過したのは、父の任国上総である。常陸よりさらに奥地としたのは、自己をおぼろに登場させる一種の虚構と見るべきであろう。

（小学館『日本古典文学全集』）

（三） 常陸で成人した浮舟を意識した虚構と考えるべき。

（今井卓爾「源氏物語と更級日記」国文学昭和三十三年十月）

右の諸説について考察を加えると、

(一)説は、古い時代の上総への道筋を言ったのだとするが、作者一行が京へ向かって帰る道筋は常陸ではなく、武威を通って帰ることが日記に記されているのだから、わざわざ古いルートを持ち出すのは納得できる説明とは言いかねる。

(二)説については、自分の登場をばかす理由が釈然としない。自分がひどい田舎ものであることを強調したかったと言いたいのであろうか。日記のこの後の展開に何の関係もないように思うが、そういう虚構を用いる理由が釈然としない。

(三)の説に関しては、『源氏物語』中の浮舟の描かれ方を検証する必要がある。彼女の生母であった中将の君は、妻を亡くした八の宮に情けをかけられ浮舟を生み落とした。しかし、八宮に認知されず、その後受領の後妻となった。その受領が陸奥や常陸の国に赴任したため浮舟も都から遠く離れた地で成長したと描かれる。

陸奥の国の守の妻になりたりけるを、ひととせ上りて、その君(浮舟)たひらかにものしたまふよし、このわたり(八宮の周辺)にもほのめかし申したりけるを、聞こしめしつけて、さらにかかる消息あるべきことにもあらずとのたまはせ放ちければ、かひなくてなん嘆きはべりける。さて、また、(浮舟の継父は)常陸になりて下りはべりにけるが、この年ごろ音にも聞こえたまはざりつるが、この春、上りて、かの宮には尋ね参りたりけるとなん、ほのかに聞きはべりし。

(小学館・日本古典文学全集『源氏物語』5〈宿木〉四六〇頁)

浮舟は幼少の頃に「陸奥の国」で育った人であり、その後ひとたびは京に上ったものの、再び常陸に暮したという設定になっている。ということは、日記の冒頭に古歌を引用しながら自分の出自を詐称する理由として、『源氏物語』の浮舟を意識していた可能性は十分考えられるようだ。しかも日記中には次のような記述が存在する。

(1) このごろの世の人は十七八よりこそ経よみ、おこなひもすれ、さること思ひかけられず。からうじて思ひよることは、「いみじくやむごとなく、かたち有様、物語にある光源氏などのやうにおはせむ人を、年に一たびにても通はしたてまつりて、浮舟の女君のやうに、山里にかくしすゑられて、花、紅葉、月、雪をながめて、いと心ほそげにて、めでたからむ御文などを、時々待ち見などこそせめ」とばかり思ひつづけ、あましごとにもおほえけり。(三二七頁)

(2) その後はなにとなくまぎらはしきに、物語のこともうちたえ忘られて、ものまめやかなるさまに、心もなりはててぞ、

などで、多くの年月を、いたづらにて臥し起きしに、おこなひをも物詣をもせざりけむ。このあらましごととても、思ひしこともは、この世にあんべかりけることもなりや。光源氏ばかりの人は、この世におはしけりやは。薫大将の宇治にかくしすゑたまふべきもなき世なり。あなものをぐるほし。いかによしなかりける心なり、と思ひしみはてて、まめまめしく過ぐすとらば、さてもありはず。

(三三二頁)

(1)は万寿三年ごろ、作者が十九歳くらいの時だと考えられる。浮舟への強い憧れを抱いていたことが伺われる。それに対して(2)は三十代の半ば、孝標女はすでに結婚し、その生活に幻滅を感じることで、浮舟の話は物語世界の中だけに存在するのだと自覚した頃の記述と考えられる。この両者の書き方には共通したものがあり、時間とともに変化する作者の思いを意識的に表現していると考えられる。これらのことを考え合わせると、日記の冒頭は(三)説の言うように、浮舟を意識して自分の出自を偽装していると考えるのがもっとも合理的であるようだ。ということは『更級日記』は、その書き手が浮舟によく似た生い立ちの人であると思わせるように事実を変更して書いていることになる。そのことに気づいた人は、日記の主人公がこれからどうなっていくのか大いに関心を持っただろう。薫と匂宮という二人から懸想され、板挟みの苦悩からついに宇治川へ入水を決意する。だが横川の僧都に救われ出家し、この世の苦悩から離脱出来たかに見えたが、薫に知られてしまい、また苦悩の日々に戻っていく。その結末は書かれないまま『源氏物語』は終わっている。浮舟がその後どう生きて行ったのかは、『源氏物語』の読者であれば是非とも知りたいことに違いない。まして生い立ちも似通う孝標女にとって、浮舟の人生は他人事でない自分自身に密接に関連することでもあった。

『更級日記』は従来「物語の世界を夢見ながらも、現実には幻滅した平安朝の一女性の日記」というような評価をされて来た。筆者はその考え方は『更級日記』の本質を全く捉えていないと考えるが、そういう考え方が受け入れられて来たのは、冒頭箇所解釈が表面的過ぎることによるのだと思う。この日記を書こうとした動機が、実は自分の半生を描こうとしただけではなく、まだ他にあるのではないか。そう考えるようになったのは冒頭の「等身に薬師仏を造りて」とある一節が妙に気になるようになったことによる。等身の薬師仏を造り、「京へとくあげたまひて、物語の多くさぶらふなる、あるかぎり見せたまへ」と祈願する作者は、物語への限らない願望を抱く少女というように受け止められ、現代にも通じる微笑ましい文学少女を思い浮かべられる。しかしこの回想記を、若き日に物語に感溺した浅薄さを反省し、一心に極楽を希求する女性の一代記として読むだけでよいのだろうか。実は孝標女は、したたかな仕掛け「意図」を施した設計図のもとに、この日記を仕上げていたのではないだろうか。それを解明する鍵が、「薬師仏」にあるのではないか。そのことを第二節で述べよう。

第二節 「等身の薬師仏」の意味するもの

さて、第一節で指摘したのは、日記の冒頭箇所が物語との繋がりがかりに目を奪われ、最も重要な作者の仕掛けに気づかなかつたのではないかということだった。つまり日記の背景には重要な、ある企み「意図」が隠されている。ではその企みとは何かというと、まず冒頭箇所に現われる「薬師仏」にその「カギ」がある。

いみじくもとなきままに、等身に薬師仏を造りて、手洗ひなどして、人まにみそかに入りつつ、「京へとくあげたまひて、物語の多くさぶらふなる、あるかぎり見せたまへ」と、身をすてて額をつき祈り申すほどに、十三になる年、のぼらむとて、九月三日かどでして、いまたちといふ所へうつる。

(二八三頁)

従来、この傍線部分は「父の任期が満了したことで、あこがれの物語が待ち受ける京の地へ旅立てることになった」と解されるが、よく読んでみればそうは書いてない。原文どおりに読めば「自分の祈りを薬師仏が受け留めてくれ、十三歳の年に上京する」と読めるように書いてある。つまり、あくまでも「薬師仏のご利益」によって上京することになったと書いてあるのだ。くり返すが、父親の四年の任期が満了したからではない、薬師仏への誓願が叶って彼女は上京することになったと書いてある。ところが従来この主題は薬師仏ではなく、少女が薬師仏に祈願した内容が重視されて来た。「物語の多くさぶらふなる、あるかぎり見せたまへ」ここが重要であると読まれることから、文学少女孝標女像が先行して『更級日記』は評価されてきた。だがそう読まれたことで、結果的に日記の意図は取り違えられてしまった。何故ならここで描かれる「薬師仏」には特別な思いが込められていることに気付かなくてはならないからだ。

実は『更級日記』の中で、仏の名が具体的に記されるのはこの「薬師仏」ともう一箇所しか存在しない。そのもう一つというのが日記の後半に登場する「阿弥陀仏」である。孝標女は日記中で多くの寺に参詣し、中には本尊を薬師仏や阿弥陀仏とする有名寺院もあるが、決してその名を書き表すことはなく、単に「仏」とだけ表現している。とすれば何故ここでわざわざ「薬師仏」とその名を明らかにしたのだろうか。それは後半に現われる阿弥陀仏と関係があるのではないかと考えるのだ。そこでまずここで描かれる「薬師仏」の実体が一体どういうものであったのか。津本信博氏のまとめたものがあるので、それを見ることから始めよう。

「等身に薬師仏をつくりて」は、従来、次のように解釈されている。

○薬師仏の像を等身に作って

○その仏像を命じて作らせる人と同じ背丈に薬師如来の像を作って

○薬師如来の等身像を作ってもらい

○願主である作者の身の丈と同じ高さに薬師仏を造って

これらの解釈に従うと、孝標女が等身大の薬師仏を自ら彫刻したか、あるいは仏師に依頼して彫刻させたか、いずれかということになる。王朝の一女性である十三歳の少女が自らそのか細い腕で鑿をふるうという逞しい一面も型破りで興味を呼ぶが、果たして自ら彫刻したのであろうか。あるいは「作る」という語に『源氏物語』などにみるような使役的な意を込めて「作らせる」という意に解すべきか。従来の解釈はほとんど後者の解によっている。

日記の本文中に、「人まにみそかに入りつつ、「京にとくあげ給ひて、物語の多く候ふなる、あるかぎり見せ給へ」と祈る十三歳の少女の姿や、「人まにはまゐりつつ、額をつきし薬師仏のたち給へるを、見捨てたてまつる悲しくて、人しれずうち泣かれぬ」と人目を忍んでこっそり仏に願をかける少女のいじらしい行為も、仰々しい等身大の彫刻ということになれば、興ざめなものとなり、そのわざとらしい作者の行為に興味が半減するという結果をまねくのではないかと思われる。「人まにみそかに入りつつ」「人まにはまゐりつつ」という行為も、等身大の薬師仏を仏師に彫らせては、全く意味を為さず、むしろ人目につきやすく、孝標女の心情とは裏腹に、その行為が極めて作爲的なものと解されよう。

この箇所は、作者自らの手になる等身大の薬師仏と解してみてもどうかと思われる。それも等身大の薬師仏を彫刻するのではなく、絵筆あるいは身近にある小刀か鋭利な小石のようなもので、壁面に大きく描いたものと考えられる。孝標女の物語を読みたいという少女の一途な夢を、自らの手で、それもできる限り大きく描くことにより、叶えてもらおうべく、心はずませて壁面に自分の背丈と同じ大きさに薬師仏を描いたものと推測するのである。

(津本信博『更級日記の研究』三三三九頁～三四〇頁)

津本氏がこの薬師仏を作者の描いた「壁画」と解釈しておられるところは従来の説と異なるところだ。しかし、すぐ後の記述に、年ごろあそびなれつる所を、あらはにこほちちらして、たちさわぎて、日の入りぎはの、いとすこく霧りわたりたるに、車に乗るとて、うち見やりたれば、人まには参りつつ額をつきし薬師仏の立ちたまへるを、見すてたてまつる悲しくて、人知

れずうち泣かれぬ

(二八四頁)

という記述から考えると、薬師仏を取り巻く外壁は壊され、外から丸見えの状態であるなら壁面が存在しないのだから、残念ながら壁画説には無理があるのではないか。また壁を取り除いた中に「立ちたまへる」とあるのだから、この仏像は立像と考えるのが妥当だろう。その薬師仏は「年ごろあそび馴れつる所」に安置されたところなので、御堂に納められていたのではなく、日頃作者が遊び暮しているような場所に置かれていたことになる。そして、ここが最も理解し難いところとなるのだが、作者一行が上京するに際し、「薬師仏の立ちたまへるを、見すてたてまつる悲しくて」とあることだ。書いてある通りに理解すれば、仏像は野晒しの状態でその場に放置されたことになる。この仏像が、仏師の手によって彫り上げられたものなら、なぜ寺や知り合いに仏像を預かってもらわないのか。作者の身長に合わせてわざわざ造った仏像を、そのように粗略に扱う理由は何故であろうか。これに関し、筆者は以前『宇治拾遺物語』の中から次の説話を見つけ出し、説明しようとしたことがある。

昔、兵頭大夫恒正といふ者ありき。それは筑前国山鹿の庄といひし所に住みし。(中略)「この僧は仏師か」と問へば、「さ候ふ」といふ。「正行が仏や造りたる」と問へば、「造り奉りたり」といふ。「さて、それは何仏を作り奉りたるぞ」と問へば、「え知り候はず」と答ふ。「とはいかに。正行知らずといふ。仏師知らずは、誰が知らんぞ」といへば、「仏師はいかでか知り候はん。仏師の知るやうは候はず」といへば、「さは誰が知るべきぞ」といへば、「講師の御かたこそ知らせ給はめ」といふ。仏師は腹立ちて「物の様も知らせ給はざりけり」とて立ちぬ。「こはいかなる事ぞ」とて尋ぬれば、「はやうただ仏造り奉れ」といへば、ただ円頭(まろがしら)にて斎の神の冠もなきやうなる物を五頭刻み立てて、供養し奉らん講師して、その仏、かの仏と名をつけ奉るなりけり。

(小学館 古典文学全集『宇治拾遺物語』巻第九、五「恒正が郎等、仏供養の事」)

筑前国の田舎で起きた出来事として、恒正の郎等正行という男が仏像を造って供養しようとしたが、何の仏像を造ったかは造らせた施主も知らず、造った仏師にも分からなかつたのだという。そのことを衆人に笑い罵られると、仏師は怒り出し、「五体の仏像を急いで造れと言われたから、ただ丸い頭をした仏像らしきものを五体彫り上げたまでで、後ほど僧侶(説教僧)が適当にその名は付けるであろう」というのである。地方においては、仏師といっても仏像に関して詳しい知識を持ち合わせていたわけではなく、仏像らしきものを彫り上げると、僧侶や大衆が勝手に何の仏様と決めたこともあるようである。民衆は深い知識も持

たず、ただ手を合わせる対象が必要だったからかもしれない。

孝標女の「等身の仏」もその類ではなかったろうか。時代は下るが、江戸時代前期に円空という遊行僧が存在したが、その生涯に実に十二万体の仏像を彫ったといわれている。その多くは権門や富裕層の人達に向けて彫られたものではなく、多くは庶民のために造られた素朴な仏像であった。五来重に次のような言及がある。

庶民の信仰を集めた霊仏には、しばしば遊行者がつくりあたえたとか、化人来たりてこれを彫ったという説話がついている。貴族や支配者の建立する仏像は、名ある仏師が念入りに製作したのであろうが、村里の庶民は遊行聖の手作りの像をまつり、化人の作仏として庶民信仰の対象とした。行基菩薩とか弘法大師作の寺伝をもつ古仏はそのようなものであろう。

遊行聖のつくった仏像説話の代表的な例は『粉河寺縁起』である。宝亀のむかし、紀伊国那賀郡の狩人、大伴孔子古（おとおものくじこ）は山中に光明赫奕たる霊地をみつめて、精舎を建て、仏像をつくりたいと願う。まもなく一童男行者があらわれて、我は仏工であるから孔子古のために仏像をつくろうと申し出る。童男行者とは山伏のような半僧半俗の遊行聖をあらわした名称である。

（五来重『円空と木喰』・角川ソフィア文庫）

このような、仏師が作者の周辺にいた可能性は否定できない。都から離れた上総の地に、地元の人々の要望に応えて仏像を彫り上げた『宇治拾遺物語』や『粉河寺縁起』に記されるような人物が存在したとしてもおかしくはない。そんな仏師が、十三歳の少女の等身大の仏像を気軽に彫り上げてくれたのかもしれない。そんな仏像なら、寺にも知人にも預けず、東国の地に置き去りにされることも止むを得なかったのではないか。都まで持ち帰る価値が仏像にはなかったのだ。

ところで、本文に「等身に薬師仏をつくりて」とあることから、この仏像を菅原孝標女自身が造ったとする説が根強く唱えられて来たが、それはあり得ないと思う。何故なら、十歳ばかりの少女が他の仏像との違いを認識し、「薬師仏」を彫り上げることなどは、まず不可能だと思われるからだ。先ほど引用した『宇治拾遺物語』のような説話が残されていることから、その辺の事情は伺えるだろう。

このように考えてくると、この「薬師仏」がどのような仏像であったのかは、まことに曖昧模糊としていて不明としか言えない。そういう得体の知れない仏像であるが、考えているうちに、実は孝標女はここにどうしても「薬師仏」という名前を登場させたかったのではないかと思いついた。そもそも薬師仏は、その名の通り、治病、延命、産育などに利益のある仏だが、そういう仏に対して、「京へとくあげたまひて、物語の多くさぶらふなる、あるかぎり見せたまへ」と祈願することは、いささか見当

違いではないかという気もする。もちろん薬師仏は古代社会において病に限らず庶民のあらゆる祈願も聞き届けてくれる現世利益の仏でもあった。先ほども指摘したが、『更級日記』中で、仏の名が明記されるのは、この「薬師仏」と、もう一つは作者の晩年の夢に登場する「阿弥陀仏」の二例しかない。仏の名を記すのが特別であることは、作者が上京後しばらくして「広隆寺」に祈願する次のような記述がある。

親の太秦（の広隆寺）にこもりたまへるにも、ことごとくこのことを申して、出でむままにこの物語見はてむと思へど見えず。いとくちをししく思ひ嘆かるるに、をばなる人の田舎よりのぼりたる所にわたいたれば、「いとくつくしう生ひなりにけり」など、あはれがり、めづかしがりて、かへるに、「何をかたてまつらむ。まめまめしき物は、まさなかりなむ。ゆかしくしたまふなる物をたてまつらむ」とて、源氏の五十余巻、ひつに入りながら、在中将、とほぎみ、せり河、しらら、あさうづなどいふ物語ども、一袋とり入れて、得てかへる心地のうれしさぞいみじきや。（中略）夢にいと清けなる僧の、黄なる地の袈裟着たるが来て、「法華経五の巻をとく習へ」といふと見れど、人にも語らず、習はむとも思ひかけず。

（三〇一～三〇二頁）

傍線を施した「太秦」は、広隆寺のことだが、この他にも日記中にはあと二例太秦の広隆寺に参詣する記事が存在するので、孝標女にとって広隆寺は馴染みの寺であったと思われる。この寺は古くは弥勒菩薩が本尊であり現在国宝に指定されているが、平安遷都前後に本尊が薬師如来像に代わったと考えられている。このことは広隆寺の財産目録ともいうべき『広隆寺資財交替実録張』の「仏物章」に次のようにあることから判明する。

靈驗薬師仏像檀像（居高三尺）、在内殿	今校全
金色弥勒菩薩像一体（居高二尺八寸）	所謂太子本願御形
金色阿弥陀仏像一体（居高四尺）	今校大破
同仏脇時菩薩像二体（居高三尺八寸）	今校大破
不空罽索菩薩檀像一体（立高一丈七寸）	
金色弥勒菩薩像一体（居高二尺八寸）	

已上仏菩薩像本自所奉安置

〔統群書類従〕二七輯上・釈家部

「檀像」というのは白檀などに彫刻した仏像のことであり、「校全」とは状態が健全ということ。最後の行にある「已上仏菩薩像本自所奉安置」というのは、これらの仏像が広隆寺の金堂に安置されていたということ、その仏像群の冒頭に「靈驗薬師仏像檀像」の名が記されるので、この薬師仏こそが広隆寺の本尊であったことが分かる。『広隆寺資財交替実録張』の成立年代は、この文書の中の「雑交文」のなかに「貞観十五年（八七三）一卷、仁和二年（八八六）一卷作」とあることから、つまり九世紀末頃から広隆寺の本尊は薬師仏であった。さらに、『日本紀略』長和三年（一〇一四）五月五日には次のような記事が載っている。

五日庚寅、東西京貴賤、挙首參広隆寺。人云、寅年五月五日庚寅日、薬師如来奉安置此堂之故也

（増補校訂『国史大系』一一「日本紀略」長和三年条）

京の人々が争って広隆寺に参詣したのは、薬師如来が寅年の五月五日に安置されたからで、その記念日にお参りをして、靈驗にあやかろうとした。その背景には、広隆寺の薬師仏が靈驗あらたかな仏という認識が広がっていたからだ。長和三年といえば、『更級日記』とほぼ同じ時代であるから、孝標女が太秦に籠もって願を掛けたのは、本尊である薬師如来像に対してであることはまぎれもない。この後、「源氏の五十余巻、ひつに入りながら、在中将、とほぎみ、せり河、しらら、あさうづなどいふ物語ども、一袋とり入れて、得てかへる心地のうれしさぞいみじきや」と、孝標女の願いは叶う。つまり上総のときと同じように、薬師仏の御利益が繰り返されたのだ。それにもかかわらず、ここで孝標女は一言も、靈驗あらたかな「薬師仏」の名を記していない。薬師仏は上総でも京でも二度も少女の切実な願いを叶えてくれたのに、なぜ上総のときにだけその名を表明し、京の地ではその名を表記しないのであろうか。そこに謎を解く鍵がある。それは上総が「あづま」に位置することと関係する。「薬師仏」は、「あづま」と密接な関連を持っているのだ。日記の冒頭に「あづま路の道のはてよりも、なほ奥つかた」と自分の生い立ちを事実とは異なつて、東であることを非常に強調して書いてあった理由は、浮舟との関係も匂わせながら、実はその裏にもう一つ重要な理由が存在するのだ。それは第三節で述べるように、薬師仏の居場所は東方に遠く隔たる「東方浄瑠璃世界」と仏典に記されている。つまり「薬師仏」は上総が東国の地であるからこそ意味があるのだ。となると、それがどんなに靈驗があろうが京の地において薬師仏の名を出すことにはもはや意味がなくなってしまうのだ。そして西方浄土の教主は、言わずと知れた阿弥陀仏であった。こういう地理的な視点が従来の『更級日記』研究には欠落していた。そしてそこに『更級日記』の隠された意図を探る重要なヒントが潜んでいると考える。

では次に、阿弥陀仏との薬師仏との関係を考えながら、もう一步考えを進めよう。

第三節 『更級日記』 — その隠された構造をめぐって

— 東方薬師如来から西方阿弥陀如来の浄土へ —

前節に続き、薬師仏の考察から始めよう。「薬師仏」は玄奘三蔵が訳した『薬師本願功德経』の一節に次のように説明されている。「東方此過十恒河沙等仏土有。世界名淨瑠璃。仏号薬師瑠璃光如来」。薬師仏の正式な名称は「薬師瑠璃光如来」といい、我々が居住する世界の東方にあたる浄土の教主と記される。

前節で「薬師如来は『東』の仏である」と述べたのは、この仏が仏典によって、東方世界の教主とされていることに注目したからである。また、『更級日記』の冒頭にある、

あづま路の道のはてよりも、なほ奥つかたに生ひ出でたる人、いかばかりかはあやしかりけむを、いかに思ひはじめけることにか、世の中に物語といふもののあるなるを、いかで見ばやと思ひつつ、つれづれなるひるま、よひぬなどに、姉、継母などやうの人々のその物語、かの物語、光源氏のあるやうなど、ところどころ語るを聞くに、いとどゆかしさまされど、わが思ふままに、そらにいかでかおほえ語らむ。

「あづま路の道のはてよりも、なほ奥つかたに生ひ出でたる人」というのは作者の育った場所を故意に改変しているが、その理由は『源氏物語』の浮舟の出自に合わせるため、孝標女が自分の出自を偽装したのだというように考えられている。それは半分正しいのだが、実はこの背景にはもう一つ重要な事実が隠されていると述べてきた。それは後半に登場する阿弥陀仏との関係によって明確に解き明かされる。

十数歳の作者が父に連れられ幼い時を過した土地は、東国の地である上総国であった。日記の後半で、阿弥陀仏が作者を迎えるに夢が記されるが、当時流行していた仏教的終末観である「末法」の世を迎える中で、上層貴族の多くが極楽浄土への往生を希求していた時代背景を考えれば、作者もその夢を夢として終わらせたくないと考えたとしても無理のないことであろう。そこでこの阿弥陀仏の夢にかける思いこそが『更級日記』の最も重要なポイントであり、この夢を何とか夢で終わらせたくないと願望が『更級日記』の成立に大いに関係していると考えられる研究者も多い。しかし日記の作者は同時に浮舟でもあったことを忘れてはならない。

話を戻すが、冒頭箇所「あづま」という地が強調されていたことも、実はそれが東方に位置する国であり、その地にふさわ

しい薬師仏に光を当てることが眼目であったと考えられる。もう一度薬師仏の描写に注目すると、

いみじく心もとなきままに、等身に薬師仏を造りて、手洗ひなどして、人まにみそかに入りつつ、「京へとくあげたまひて、物語の多くさぶらふなる、あるかぎり見せたまへ」と、身をすてて額をつき祈り申すほどに、十三になる年、のぼらむとて、九月三日かどでして、いまたちといふ所へうつる。

年ごろあそび馴れつる所を、あらはにこほちちらして、立ちさわぎて、日の入りぎはの、いとすごく霧りわたりたるに、車に乗るとて、うち見やりたれば、人まには参りつつ額をつきし薬師仏の立ちたまへるを、見すてたてまつる悲しくて、人知れずうち泣かれぬ。

(二八三～二八四頁)

薬師仏との別れは、作者の十三歳の年の九月三日のことであった。その時は、あたり一面に霧が立ち込め、時間は「日の入りぎは」とあるから夕刻であり、日は西に傾いていた。そして薬師仏は立ったままのお姿で、作者が旅立つのを見送ってくれたということになる。この一節を読むと、描かれる場面は作者が旅立ちの時の光景をそのまま写したかのように思われる。しかし、後半に描かれる阿弥陀仏の描かれ方と対比する時、文の意味はだいぶ異なってくるように思われる。

さすがに命はうきにもたえず、長らふめれど、後の世も思ふにかなはずぞあらむかしとぞ、うしろめたなきに、頼むこと一つぞありける。天喜三年十月十三日の夜の夢に、ゐたる所の家のつまの庭に、阿弥陀仏立ちたまへり。さだかには見えたまはず、霧ひとへ隔たれるやうに、すきて見えたまふを、せめて絶え間に見たてまつれば、蓮華の座の、土をあがりたる高さ三四尺、仏の御たけ六尺ばかりにて、金色に光りかがやきたまひて、御手かたつ方をばひろげたるやうに、いまかたつ方には印を作りたまひたるを、こと人の目には、見つけたてまつらず、われ一人見たてまつるに、さすがにいみじくおそろしければ、簾のもと近くよりもえ見たてまつらねば、仏、「さは、このたびはかへりて、後に迎へ来む」とのたまふ声、わが耳一つに聞こえて、人はえ聞きつけずと見るに、うちおどろきたれば、十四日なり。この夢ばかりぞ後の頼みとしける。

(三六一頁～三六二頁)

西方極楽浄土の教主である阿弥陀仏は、霧の中に立って作者を迎えようとしている。冒頭部の薬師仏とこの阿弥陀仏は、打てば響くように東西で向き合う仏といわれる。冒頭部の薬師仏は、実は上総から西に位置する都へ作者を見送ろうとしていると読め

る。それも霧の中に送り出す薬師仏、霧の中で迎えようとする阿弥陀仏。なぜか二つの仏の描かれ方に共通したものが感じられないだろうか。そこで両者を並べ、より精細に比較検討してみよう。

(1) この二つの箇所以外に日記の中で仏の名称を記した箇所はない。それから阿弥陀仏の夢が、「天喜三年十月十三日」と年月日が記されていることが従来から特に注目されてきたが、薬師仏の方も子細に読めば、「十三になるとし」とあり、続いて「九月三日」と記している。このことは年月日を記すことと同じように、作者の人生の中における画期的な出来事であったことを年月日で明記しようとしているのだと考えられる。自分の年齢をはっきり示すのは日記中こだけであるからだ。つまり、薬師仏との別離と阿弥陀仏との邂逅とは、作者自身が人生の中でその年月日を特筆すべき重要な出来事であったという認識があったと考えられる。

(2) 次に、阿弥陀仏は「さだかには見えたまはず、霧ひとへ隔たれるやうに、すきて見えたまふを、せめて絶え間に見たてまつれば」というように、霧に隔たれてはつきり見えないと描かれるが、薬師仏の方もまた「日の入りぎはの、いとすこく霧りわたりたるに」とあるように両者ともに霧の中に立ち現われるというごく似通った表現になっている。

(3) 二つの仏の形状について、「阿弥陀仏立ちたまへり」、「薬師仏の立ちたまへる」とあることから、どちらも立像ということが分かる。阿弥陀如来像、薬師如来像ともに両者を立像という相似形にしたのは、作者の意識に何らかの思いが働いたからではないだろうか。また、作者が夢に見た阿弥陀仏は、「仏の御たけ六尺ばかりにて」とあるが、薬師仏の大きさも「等身に薬師仏を造りて」と両者ともに具体的な大きさが記されていることにも注目される。つまりこの二つの仏は日記中に書き記される他の多くの仏とはまったくその認識のされ方が異なっていることが注目される。

(4) 阿弥陀仏は「こと人の目には、見つけたてまつらず、われ一人見たてまつるに」、「わが耳一つに聞こえて、人はえ聞きつけずと見るに」というように作者個人の宗教体験として語られるが、薬師仏の方もまた「人まにみそかに入りつつ」、「人まには参りつつ額をつきし薬師仏」、「人知れずうち泣かれぬ」というように他人を交えない、作者の個人的な信仰として描かれている。

以上まとめたとように、両者の表現が似通っているのは、作者が薬師仏と阿弥陀仏両者の描写を関連するものと認識し、恐らく同時期に記したことによるのだろう。その理由は、作者が阿弥陀仏の夢を、夢として終わらせずに、何としても確実な意味あるものとして位置付けようとしたからだと考えられる。『更級日記』には十一の夢が記されているが、作者に限らず古代人は夢というものに不思議な力を感じてはいた。けれども頭からそれを信じていたわけでもなかった。そのことは夫の死を嘆く一節に、

初瀬にて前のたび（初瀬参籠の時に見た夢）、「稲荷より賜ふしるしの杉よ」とて投げ出でられしを、出でしままに、稲荷に詣でたらしかば、かからずやあらまし（夫の死去というような不幸があったらうか、いやなかつたらう）。年ごろ「天照御神を念じたてまつれ」と見ゆる夢は、人の御乳母して、内裏わたりにあり、みかど、後の御かげにかくるべきさまをのみ、夢ときもあはせしかども、そのことは一つかなはでやみぬ。ただ悲しげなりと見し鏡の夢のみたがはぬ、あはれに心うし。

（三五九頁）

という過去の夢に関する記述が語られ、その前半では夢の中で稲荷から杉を頂戴したにもかかわらず、お礼参りをしなかつたから夫の死というような不幸に見舞われるという懺悔が語られる。後半は天照御神の夢を夢解きに合わせると、高貴な方の乳母とすることがつらい、と言っていることから夢に対する作者の態度が伺える。けれども、そういう作者が、極楽に迎え取ってくれるという阿弥陀仏の夢だけは、何としても確信したかった。引用箇所にある「この夢ばかりぞ後の頼みとしける」という言葉こそ作者の本音であったといえよう。そのためには彼女は自分のそれまでの人生を回想し、自分が極楽往生にふさわしい人間であるのか、その証明が得たかった。つまり日記はそのために書かれたのではないだろうか

ところで、今述べた夫橋俊通の死の記述はこの阿弥陀仏の記事の前に記されている。しかし実際の夫の死去は、底本傍注に「康平元年（一〇五八）十月五日卒 五十七」とあり、この阿弥陀仏の夢より三年も前のことである。つまり阿弥陀仏の夢を見たのと、夫の死去は順序が逆になっている。ではなぜ作者はそんな操作を行ったのか。犬養廉氏はこの逆転に関して次のように注を加えている。

この弥陀来迎の夢は、年次をさかのぼり、しかも、年月日を明記特筆したものととして注目に値しよう。わびしい晩年の支えとなつたものであろうが、日記のだいたいは前段「功德も作らずなどしてただよふ」でほぼ段落を画している。「さすがに」

という心境反転で展開するこの段は、一応の筆をおさめた後、さらに付注的に書き継がれた観がある。(二六〇頁・頭注)

だが、果たしてこの注釈は的を射たものであろうか。特に後半「『さすがに』という心境反転で展開するこの段は、一応の筆をおさめた後、さらに付注的に書き継がれた観がある」という解釈には釈然としないものがある。この「さすがに」はあきらかに前段、夫の死去のような不運な悪因果を受けていると考えるべきだろう。「そんなつらいことに遭つても、命は途切れることなく……」と前を受け、そういう状況下で唯一頼みに出来ることは、天喜三年の夢なのだとして続けて読むべきだろう。つまり意図的に作者は「夫の死去」というつらい現実も「阿弥陀仏の夢」によって手は差し伸べられている、というように現実をすり替えようとしたのだと考えられる。また関根慶子氏は、

この夢を年月順におかねばならない理由もないと思われるし、作者の絶望のどん底からたどり着いた最後の拠り所であればこそ、この夢だけをさかのぼってここに語り、またこの夢のみを重要視すればこそ、これにだけ年月日を付したものと考えられないであろうか。
(関根慶子『更級日記』全訳注・講談社学術文庫、三三五頁)

というように述べられる。だが「この夢を年月順におかねばならない理由もないと思われる」という一言は、『更級日記』という作品をどう位置付けるのか、従来の研究を考え直させるような一言であるようにも思う。そして阿弥陀仏の夢の重要性を語るためにこそ『更級日記』は書かれたと考えている筆者にはいっそう重要な言葉である。実は、冒頭箇所の記事もこの阿弥陀仏の夢を現実化したという作者の思いが書かせたものだと考えるのだ。

ところで、東方瑠璃光浄土の教主である薬師仏と、西方極楽浄土の阿弥陀仏とは互いに密接な関係を持った仏であるという考え方は人々の間に共有されていた認識でもあった。たとえば、京都に現存する「浄瑠璃寺」は、当初の本尊が薬師如来であったことで、薬師仏の浄土である名が寺の名になったのであった。寺の建立は永承二年(一〇四七)といわれるから、孝標女の四十歳頃に当たる。そしてやがてこの寺は九体の阿弥陀仏が安置される西の阿弥陀堂と、薬師如来が安置される東の三重塔とが、池を挟んで向かい合う伽藍の配置となった。こうして寺には、東の教主である薬師如来が衆生を西に向かつて送り出す「遣送仏」であるのに対し、西方極楽浄土の阿弥陀仏が衆生を迎え取ってくれる「来迎仏」という信仰が今に伝わっている。だがこの伽藍配置は、藤原道長が寛仁三年(一〇一九)に建立した法成寺がその始まりで、その伽藍配置については、杉山信三氏の著作に詳しく述べられている。(杉山信三著『院家建築の研究』第二編・藤原氏の氏寺とその院家) 作者が上総から上京してきた頃は、

ちようどその法成寺が建築の途上であった。これ以降これに類する伽藍配置は数多く平安時代に作られた。そしてこの薬師仏と阿弥陀仏の関係については『栄華物語』にも次のように記されている。

阿弥陀堂に殿（道長）のおはしまして御念仏させたまふを見たてまつらせたまふにも、この世より行く末までも、あはれにも頼もしく見たてまつらせたまふ。「阿弥陀仏と念じたてまつる人をば、二十五菩薩もまもりたまふなり」と、唐の大師（善導大師）ののたまへり。また、「念仏して極楽をのぞむ人もし参ること危ぶみあらば、薬師如来八菩薩を添へて、極楽に送れと告げたまふなり」など思しあはせたまふに、殿の御前の御有様に、いづれの御前たちも、頼もしくめでたく見たてまつらせたまふ。
（小学館・日本古典文学全集『栄華物語』巻十七「おむがく」二八八頁）

傍線部の意味は「念仏をして極楽を望む人もしも、その往生に危惧があるならば、薬師如来が八菩薩を添えて、その人を極楽に送れとお告げになるという事だ」と解せる。西方極楽往生が危ぶまれる人を、薬師仏が阿弥陀仏のもとへ送ってくれるというこの信仰を、『更級日記』の記述と重ね合わせてみれば、今まで何気なく読み過ごされてきたことが、さまざまな意味を持って書かれていたのだと判明する。

この東の薬師堂と、西の阿弥陀堂が対置する伽藍形式はその後平安時代の人々の気持ちを捉えたらしく、三十三もの寺院に採用されたということが、福山敏男氏の研究で明らかにされている。（福山敏男著作集3『寺院建築の研究』下「九体阿弥陀堂」中央公論美術出版）ということは、平安時代の人々にとっては一般的な知識であり、孝標女も当然知っていたと思われる。そうしてみれば、『更級日記』という作品が、冒頭箇所の東方薬師仏による西へ向かつての送り出し。そしてその晩年に阿弥陀仏の来迎による極楽往生の約束、これを日記の前後に据えたと考えられるのではないだろうか。それは当時の人々の信仰であった薬師仏と阿弥陀仏との連携に拠る極楽往生という知識が、日記の中にも取り入れられたと考えるのである。

だが阿弥陀仏の夢を具現化するために日記の文章が操作されているとすると、さまざまな疑問も浮上する。阿弥陀仏の夢の記事と前後照応するように意識的に日記の構造が形成されたなら、冒頭の薬師仏の記事にはどこまで信憑性があるのか。また阿弥陀仏の記事が、実際の夫の死去と順序が入れ替えられ、操作されているのだとすれば、『更級日記』は日記としてどこまで信じられるものなのか。従来考えられてきたように、少女時代から物語に心奪われ、仏道に疎遠な日々を送ってきたが、晩年に見た阿弥陀仏の夢で極楽往生の期待を持った平安朝の一人の女性の回想記という従来の解釈は、大きな修正を迫られることになる。

日記の仮名奥書にある例の、

よはのねざめ、みつのはままつ、みづからくゆる、あさくらなどは、この日記の人のつくられたとぞ。

(六三頁)

という一節にある『夜の寢覚』、『浜松中納言物語』については、すでに高等科紀要に拙稿を掲載し、『更級日記』の奥書にある通り恐らく孝標女の作であろうという筆者の考えを述べた。^(注二)また散逸物語である『みづからくゆる』、『あさくら』に関して、この奥書を認めているのが藤原定家であることを考えれば、同じ作者の手になる可能性はきわめて高いと思われる。現存する『夜の寢覚』には、かなりの分量の欠巻が存在していると考えられている。また『あさくら』も、かなりの量をもつ長編物語であったと考えられている。とするとこれらの作品の成立期間を考慮すれば、作者はかなり後年に至るまでその作家活動を続けていたと考えられる。こういう作家活動に関することは『更級日記』の中には一切述べられていない。しかし、相当の年齢になっても、孝標女は物語創作から足を洗っていないと考えられる。つまりそれは日記中に記される、「物語の世界には見切りをつけた」という孝標女の発言を真に受けることは出来ないことになるのだ。『更級日記』には記事を何らかの意図を持って改変している節が多々見られる。だから彼女は本気で極楽往生を考えていたのだろうか、という疑問も生じてくる。だから次に引用する倉本一宏氏の意見も気になるのだ。

最後の阿弥陀仏来迎の夢に触発されて、それまでの夢を創作したと考えることも可能であろう。しかし私はむしろ、すべての「夢」が、執筆時点で創作されたものと考えたい。その意味では、この作品は、日記というよりも、自分を主人公に仕立てて、その精神の遍歴（それすら実際に起こったかどうか疑問であり、作者は実は幼少の頃から仏教に深く帰依していた可能性もあるが）を述べた物語と評するべきであろう。作者にとって、夢とは、自己の物語を完成させるための手段に過ぎなかったことになる。

(倉本一宏著『平安貴族の夢分析』3 菅原孝標女と「更級日記」吉川弘文館)

つまりこの日記を深く読み込んでいくと倉本氏のような考え方も一概に否定は出来ない。だが、この日記は冒頭箇所ですべられていた浮舟のことを忘れてはならない。孝標女は、自分を浮舟に重ねながら、煩惱にまみれた迷いの中に生きる女に、果たして極楽往生という救いはあるのだろうか、というテーマをこそ描きたかったのかもしれない。浮舟は出家しながらも男女の愛の妄執から逃れられなかった。そんな浮舟でも阿弥陀仏は掬い取ってくれるものなのか。だが阿弥陀仏の来迎が夢によって示され希望を見出した。末法という時代に生き、物語を人生の支えとした女性にとって往生は可能なのか。そう考えるときに、冒頭箇所の作者の出自や、明確さを欠いていた薬師仏の姿も、すべてはそのテーマを完結させるために作り出された虚構であったかもしれない。

れない。孝標女が、実は平安後期から提唱され始め、中世の法然や親鸞にも大きな影響をあたえたという「天台本学論」という思想を既に身に付けていたのではないかとこの拙稿はすでに発表した。^(注三)冒頭にも述べた『更級日記』を日記として読むことは、その本質を見誤る一因となってしまう、というのはこういうことである。

第四節 『更級日記』に描かれる関寺大仏のこと

『更級日記』の記事の中に次の一節がある。

粟津にとどまりて、しはすの二日、京に入る。暗くいき着くべくと、申の時ばかりにたちて行けば、関（逢坂の関）近くなりて、山づらにかりそめなるきりかけといふものしたる上より、丈六の仏の、いまだ荒造りにおはするが、顔ばかり見やられたり。あはれに人はなれて、いづこともなくおはする仏かなとうち見やりて過ぎぬ。

ここらの国々を過ぎぬるに、駿河の清見が関と、逢坂の関とばかりはなかりけり。

（二九七〜二九八頁）

これは関寺の大仏として有名な仏像で、ここで「丈六の仏」と記されるが、実際には五丈（約十五メートル）もある大仏であった。「山づらにかりそめなるきりかけといふものしたる上より、丈六（一丈六尺＝約五メートル）の仏の、いまだ荒造りにおはするが、顔ばかり見やられたり」と、仏像を取り囲む扉から顔だけが抜け出て見えるという描写からも、その大きさが伺える。にもかかわらず「丈六」というのは不自然な感じが拭えない。しかも後に引用するように彼女は二十数年後にもこの仏を実見しているのである。もしかすると「丈六」という記述は、原文には「五丈」とあったものを、誤まって「丈六」に誤写した可能性が考えられる。

ところで傍線部「あはれに人はなれて、いづこともなくおはする仏かなとうち見やりて過ぎぬ」の解釈はなかなか難解で、研究者によってさまざまに口語訳される。いま引用してみると、

^{注三} 学習院高等科紀要・第十三号『浜松中納言物語』巻五の成立について——『浜松中納言物語』・『更級日記』の比較による再検討——

同 第十四号『夜の寝覚』の研究——『夜の寝覚』と『更級日記』の比較から——

^{注三} 学習院高等科紀要・第六号『更級日記』の構造とその信仰遍歴・天台本学思想と阿弥陀浄土信仰

諸注「所在なさそうに」のような訳を当てるが、堂舎がまだ建設中のことだから、どこのお寺ということもない、ただの「山づら」に、の意であろう。
 (岩波「新日本古典文学大系」・吉岡廣)

なんとまあ、わびしげに人里離れて、けれども場所柄など構わぬげにつくねんと立っておいでの仏様なこと、と遠くから眺めて通り過ぎてきたが、
 (小学館・『日本古典文学全集』犬養廉)

さびしく人里はなれてこんな所に、たよりなげにしていらっしやる仏様だなあと、ながめやって通り過ぎた。

(講談社学術文庫・関根慶子)

わびしそうに、人里はなれて、どこの(お寺の)ともわからないように(ぼつんと立って)おいでになる仏様だなあ

(笠間文庫 原文&現代語訳シリーズ・池田利夫)

寂しそうに、人里から離れて、(そこが)どこであるか分からないふうに、(しょんぼりと立って)いらっしやる仏様だわ、と見やって通り過ぎた。
 (小谷野純一『更級日記全評釈』一七七頁・風間書房)

この関寺大仏のことは、この記事から二十五年後の孝標女三十八歳の折に、近くを通りかかった作者によって再び次のように描かれる。

今は昔のよしなし心もくやしかりけりとのみ思ひ知りはて、親の物へゐて参りなどせでやみにしも、もどかしく思ひ出でらるれば、……後の世までのことをも思はむと思ひはげみて、霜月の二十余日、石山に参る。雪降りつつ、道のほどさへをかしきに、逢坂の関を見るにも、昔越えしも冬ぞかしと思ひ出でらるるに、そのほどしも、いとあらう吹いたり。

逢坂の関のせき風ふく声はむかし聞きしにかはらざりけり

関寺のいかめしう造られたるを見るにも、そのをり荒造りの御顔ばかり見られしを思ひ出でられて、年月の過ぎにけるもいとあはれなり。

(三四二頁)

家庭的にも安定した孝標女が、石山寺に物詣に出かける途中、二十数年前上京する折に目にした寺が「いかめしう造られ」ているのを目にしたというのである。ここでは「関寺」という寺の名が明記されているが、この寺が逢坂の関のほとりにあったことからその名がある。孝標女が上京する折にはまだ無名の寺であった。それが二十数年後には驚くほど豪壮な寺院に変貌していることを印象付けるため、最初の頃は参詣する人もないことを「あはれに人はなれて、いづこともなくおはする仏かな」と描いたのだろう。ということとは、この関寺に関する前後二つの記事は同時期に書かれたものと考えられるのではないか。それは前節で述べた薬師仏・阿弥陀仏の記事が内容的に呼応することと同じである。

ところでこの寺は『更級日記』の中ではさりげなく書き込まれている寺院であるが、孝標女が上京した翌年には京都の人々を驚嘆させる不思議な話によって、一気にその関心を高めることになった。それは、右中弁源経頼の日記『左経記』に、次のように記される。

(万寿二年) 五月十六日 天晴、関寺有牛、年来我造堂斬材木令運用、而近遇會大津住人等、夢見迦葉仏化身之由、此夢披露洛下、仍奉始大相国禅閣、関白左大臣、至于下民、拳首結縁牛云々、此堂并仏依横川源信僧都存日語、僧延慶進諸人所造立也、造作欲終功之間有此事、誠化牛欲別此界之期歟云々

(増補史料大成『左経記』万寿二年(一〇二五)五月十六日条)

関寺の造営に使役される材木運搬用の牛がいたが、大津に住む人の夢にその牛が現れ、自分は迦葉仏の生まれ変わりであると告げた。その夢の話が都に広まると、大相国禅閣(道長)や関白左大臣(頼通)を始めとして庶民がこの牛に結縁しようと参詣した。この寺は、横川の源信僧都が生前、延慶という僧に造営を勧め、諸人の協力で造営されたものだが、その完成間近になってこのことがあった。役目を終えた牛は入滅しようとしている。

また六月二日には、経頼自身、関寺に参詣し、牛を実見したことが次のように記される。

晴、早旦参向関寺、及未剋到寺、先見牛、聖人云、日者(ひごろ)有恼氣、而去晦日漸興立、廻御堂三匝、了帰本所之間、於中路臥、不堪起興仍人々合力興立、持来本所臥之後、已不興起、欲斃去也者、余聞此事、成感折念、即両三度拳頭見余、頗涕泣、及酉剋頭北面帰空、即埋堂後山帰洛。

(同書・六月二日条)

これによると、弱った霊牛がその最期を迎えようとしている時に経頼は関寺を訪れ、その牛と面会した。するとこの牛が三度頭を挙げて経頼を見たことに感激したとある。このように関寺の迦葉仏が牛に生まれ変わったという異類転生譚が、それを目の当たりにしたという公卿によって喧伝されることで信憑性が生まれたのだと考えられる。そのうえに当時の人々には、この話を受け入れる下地があった。

万寿二年（一〇二五）に成立した菅原師長の撰になる『関寺縁起』に、

寛仁二年（一〇一八）閏四月二十四日下刀。同五月二十一日終功。佛像已成。又自治安元年（一〇二二）七月九日創伽藍營作。二年八月十九日半終其功。（中略）先是治安元年十一月八日夜。近松寺僧證昭偶夢異僧來告白。汝拜関寺弥勒佛乎。昭答曰未也。僧曰。汝不知乎此佛者往昔迦葉佛出世時現金五大身相化度群迷

（中略）時洛東清水寺有僧。名曰仁胤。興昭相好。昭往語関寺興復之事。胤曰善哉子志。我有一牛。形骸太強。異於庸牛。今則興子。以之為扶。昭悅牽販。即送関寺。以運土木。万寿元年（一〇二四）十月七日。當寺檀越周防掾息長正則、借牛使役。其夜正則夢、一僧告白。噫女過乎。此牛迦葉佛再來權現牛畜。鄙劣身扶一寺興復鴻事。是庸牛。正則、驚覺。明旦適時懺謝以返牛矣」（統群書類従第二八号上 积家部）

とある。先に引用した『左経記』とこの『関寺縁起』は、関寺創建時に成立し、当時を知る上で重要な文献でもある。また『更級日記』の描写は、縁起に書かれた内容と一致していることが分かり興味深い。そしてこの『関寺縁起』にはこの寺の本尊が「弥勒仏」であったと記されている。少し時代が下がる『栄華物語』を見ると、この関寺の牛の霊験譚は話がかなり成長し、次のように記されている。

このごろ聞けば、逢坂のあなたに、関寺といふ所に、牛仏現れたまひて、よろづの人参り見たてまつる。年ごろこの寺に、大きな御堂建てて、弥勒を造り据ゑたてまつりける。樽（くれ丸太）、えもいはぬ大木どもを、ただこの牛一つして運びあぐることをしけり。あはれなる牛とのみ、御寺の聖思ひわたりけるほどに、寺のあたりに住む人借りて、明日使はんとて置きたりける夜の夢に、「われは迦葉仏なり。この寺の仏を造り、堂を建てさせんとて、年ごろするにこそあれ。ただ人はいかで使ふべき」と見たりければ、起きて、かうかう夢を見つると言ひて、拝み騒ぐなりけり。牛もさやにて黒くて、さやかにをかしげにぞありける。繫がねど行き去ることもなく、例の牛の心さまにも似ざりけり。入道殿をはじめたてまつ

りて、世の中におはしける人、詣らぬなく詣りこみ、よろづの物をぞ奉りける。ただ帝、東宮、宮々ぞおはしまさざりける。この牛仏、何となく心地悩ましげにおはしければ、とくうせたまふべきとて、かく人詣りこみて、この聖は御影像をかかむとて急ぎけり。

かかるほどに、西の京にいと尊くおこなふ聖の夢に見えけり。「迦葉仏当入涅槃のだむなり。智者当結縁せよ」とぞ見えたりければ、いとど人々詣りこむほどに、歌詠む人もあり。和泉(式部)、

聞きしより牛に心をかけながらまだこそ越えね逢坂の関

人々あまた聞ゆれど、同じことなれば書かず。(中略)

草を誰も誰もとりて詣りけるなかに、詣らぬ人などぞありければ、それは罪深きにやなどぞ定めける。(中略)今はこの寺の弥勒供養せられたまふ。
〔栄華物語〕卷二十五「みねの月」・四七四～四七六頁

ということから、『更級日記』で孝標女が、「いまだ荒造りにおはするが、顔ばかり見やられたり」、「そのをり荒造りの御顔ばかり見られしを思ひ出でられて」と、この寺の近くを通りがかりに見かけたという仏像は、「弥勒菩薩像」であったことが分かる。『更級日記』には今まで述べてきたように、たとえ分かつていても仏の名を記さない傾向がある上、十三歳の上京時に始めて目にした時には何の仏か分からなかったのかもしれない。しかし日記製作時の年齢には当然関寺の仏像が「弥勒仏」ということを作者は知っていたはずである。しかもこの関寺の靈驗譚は、平安時代の人々には知れ渡った話で、先に引用した『栄華物語』を始め、『今昔物語集』、『古事談』、『古本説話集』、『日本紀略』、『扶桑略記』、『百練抄』など多くの説話集や古記録に書き留められた話であった。

それでは関寺の本尊であった弥勒仏とはどのような仏であったのかといえ、釈迦入滅後時代が下るにつれ仏の教えは廢れて行き、ついに末法という時代を迎える。日本では永承七年(一〇五二)が末法第一年と考えられていたようだ。それは孝標女が四十五歳に当たる年であり、恐らく彼女も末法の知識を持っていたと考えられる。末法に入れば人々の救いは無くなるが、ただ五十六億七千万年の後に弥勒仏が兜卒天から娑婆世界に下り、竜華樹の下で悟りを開いて、救いから漏れた衆生の救済を行う。つまり弥勒仏は釈迦如来の後を補う仏なのだ。実は藤原道長も『弥勒経』を写し、その経を銅製の筒に入れて吉野の金峰山に埋経したことが知られている。道長はその埋経の奥書に、阿弥陀の極楽浄土で弥勒仏の救済を待つという内容のことを書き記しているから、当時の貴族も弥勒への信仰を持つ者が多かったと考えられる。そして孝標女がよく参詣していた広隆寺であるが、実は平安遷都前後に、元々はその本尊は弥勒菩薩であったものが、薬師如来に代わったのだということは既に第二節で述べた。

さて、弥勒仏がどのような仏であったのかを勘案して、最初の一文を再考してみよう。

あはれに人はなれて、いづこともなくおはする仏かなとうち見やりて過ぎぬ

作者が仏像の近くを通ったのは寛仁四年（一〇二〇）である。『関寺縁起』によればその時には仏像は完成していたが、「自治安元年（一〇二二）七月九日創伽藍堂作。二年八月十九日半終其功」とあり、伽藍はまだ建っていないかった。ということは五丈もある弥勒仏が露座の大仏として佇んでいるのが目に入ったのである。そういう現実の姿と同時に、五十六億七千万年という時間をじつと修行を続ける弥勒仏の姿が重ね合わされていたのではないだろうか。「人を寄せ付けずに茫漠とした時間の中に佇み、ただ思惟を続けなざる仏さまであるよ」というように、この一文は解するのがよいのではないか。

最後に

『更級日記』を今まで何度か読んで来たが、あるときふと冒頭箇所薬師仏の描写が妙に気に掛かるようになった。あれはそもそもどうして薬師仏なのであろうか。そう思って具体的な姿を思い浮かべようとすると、どうもはつきりしない。考えれば考えるほど一体どのような仏像なのか思い浮かべられなくなる。「等身の薬師仏」というからには作者の身長に合わせて造ったものであろう。仏師に作らせたとすればさういふ高価なものを娘に与えるのだな。だが待てよ、孝標は作者以外にもその姉や兄（弟）を上総に連れて行ったはずだ。彼らにも同じような仏像を造ってやったのだろうか。だが、そんな等身仏を上総に置き去りにするというのは何故だろうか。この薬師仏については分からないことが多い、と思いついておるときに薬師仏と阿弥陀仏の名前だけが日記中に書き表されていることに気がつき、それから二つの仏像が平安時代に建立された寺院では、東西に向き合って祀られていることに思い至った。よく調べると、伽藍建築に置いて、二仏が向き合って配置されるその始まりは、藤原道長が創建した法成寺であることが分かった。法成寺はコの字型に伽藍が配置され、北側に金堂があり、東に薬師堂、西に阿弥陀堂が置かれ、両者の間に池があり、東側の薬師仏と西側の阿弥陀仏が向き合って配置される。その理由は、薬師仏が日出づる東方に位置することで人々を送り出す側となり、西方に位置する阿弥陀仏が人々を受け取る側となって極楽浄土に迎え取るという役割分担がなされている。このことは第三節に引用した『栄華物語』の一節に、法成寺の有様が描写されるところがあり、

念仏して極楽をのぞむ人もし参ること危ぶみあらば、薬師如来八菩薩を添へて、極楽に送れと告げたまふなり。

とあることから、当時の人々の間にも薬師仏と阿弥陀仏の役割分担が知られていたことが伺われる。『更級日記』が成立するのと同時期に創建された京都の浄瑠璃時は、平安時代の伽藍建築を今に残す貴重な遺構であるが、法成寺の伽藍建築と同じ東西に薬師堂と阿弥陀堂があり、中に池を挟んで対置する伽藍様式になっている。この寺では今でも日の昇る東は命の誕生するところであり、薬師仏は東方世界から現世に人々を送り出す役目を担うので「遣送仏」と説明されている。そしてこの世を終えれば、西方浄土に迎えてくれるのが来迎仏である阿弥陀仏という説明もなされている。(古寺巡礼2『浄瑠璃寺』佐伯快勝・淡交社)

この伽藍配置を基にした当時の人々の思いを『更級日記』に当てはめると、何かが分かるのではないかと思いついた。今まで『更級日記』は、なぜ冒頭から自分の出自を偽るような書き方がされているのか、という違和感が解けるきっかけを手に入れられた気がした。自分の現世での人生はいろいろあったが、最近見た夢に阿弥陀如来が現れ自分を極楽浄土に連れて行こうと言うが、それは本当であろうか。ためしに自分の人生を振り返ってみれば、若い時には東方の上総から薬師仏に送り出されて西に向かったのではないか。現世では物語に執着し、仏道修行を怠っていた時期も確かにあったが、自分なりに生きたという実感はある。それは彼女の作だと考えられる『夜の寢覚』の「寢覚の上」のように、未亡人となりながらも主人公「寢覚の上」は、ひたすら家庭を守り、三人の継娘の幸福を願って奔走する。あれは孝標女の実際の有様を描いたものではないか。そうして、冒頭箇所から孝標女は自分と生い立ちのよく似ている浮舟を常に意識して生きてきた。恐らく浮舟を自分の分身と想っていたのだろう。『源氏物語』は「夢の浮橋」で終わるが、浮舟の行く末がどうなるのか、その決着を見ないまままで物語りは終わりを告げた。孝標女は、強く共感を感じていた浮舟の人生に救いのある完結を望んでいたのだと思う。作者が見た阿弥陀仏の夢は、浮舟の見た夢でもあると考えたらどうだろうか。そして『更級日記』が日記でなくて回想記風物語として考えられる理由は、実は上総を出発した折、薬師仏に見送られた時から阿弥陀仏に迎え取られるまでのストーリーはあかじめ決められていたと考えれば、『更級日記』には腑に落ちるところが多くある。それは孝標女の中で、浮舟も自分も共に極楽に往生出来るに違いないという思いこそが、この日記を書かせた原動力ではなかったかと考えるからである。

(終)